

食品会社「ニッシン・トーア(株)」が自社農場獲得し、レタス生産を開始！

昨今のキーワードとして「食の分野企業から農へ熱い眼差し」があげられます。その背景は消費者から求められる「安全・安心やおいしさ・一味違うこだわり」を実現するために、農の生産工程を自らの影響力を発揮できる自前のシステムとして構築し独自の食材を確保しようとするものです。

弊社と水耕レタス販売で継続的取引のあるニッシン・トーア(株)食品部(東京日本橋、富澤一夫社長)さんも、そんな背景から本年5月愛知県愛西市立田に直営農場(1,268坪)を獲得され運営が始まりました。用地は弊社の野菜販売事業展開会社(株)エムが所有し、施設はニッシン・トーア(株)、運営は(株)エム式水耕研究所が委託を受けるといふ構図です。農地を株式会社が

所有する愛知県としても初めての事例として認知され取得できたものです。ニッシン・トーア食品部は1951年日清製粉の特約店として発足。当初小麦粉及びマーガリンの販売、その後ブドウ糖・異性化糖、ジャム等フィリングの販売を加えて、製菓・製パンの原材料問屋として発展されました。最近ではコンビニ弁当やおにぎり、サンドイッチで使用される食材の提供をするようになり、食品総合卸業として着実に事業発展を進めておられます。

立田農場で生産される水耕レタスは関東をはじめサンドイッチ用など主として業務用食材として出荷されます。清潔に管理された生産現場、特に安全・安心に留意した栽培体系、年間を通しての安定供給・安定価格など

自前農場を有しているゆえのメリットだけでなく、積極的に原材料確保に取り組んでいる姿勢が顧客に評価してもらえるとニッシンさんのお話。このように川下側の食品企業から川上の農の現場へ手を伸ばす傾向は、カゴメさんの例もわかりですが、今後増える流れになってきており新しい時代の到来だと思えます。企業が農の分野へ進出してくる事例は今後とも確実に増大してくると思えます。お互いの持つ特徴(例えば企業の資本力、経営力、農家サイドの篤農技術)が発揮でき相乗効果を得られれば発展に繋がられるわけで朗報とも取れますがいかがでしょうか。

(編集子)

